日本イギリス哲学会 第４６回 関西部会例会

日　時：２０１２年　7月２１日（土）１３：００～１７：４０
場　所：キャンパスプラザ京都　京都大学サテライト講習室（６階・第８講習室）
交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 １：１３：００～１４：２５（討論を含む）
報 告 者：岸野　浩一（関西学院大学大学院　法学研究科博士課程後期課程）
題　　目：デイヴィッド・ヒュームの国際社会理論
―国際関係研究における英国学派の思想とその再検討―

報 告 ２：１４：４０～１６：０５（討論を含む）
報 告 者：武井　敬亮（京都大学大学院　経済学研究科博士後期課程）
題　　目：ジョン・ロックの反聖職者主義について
―サミュエル・パーカーとの比較を中心に―

報 告 ３：１６：１５～１７：４０（討論を含む）
報 告 者：苅谷　千尋（立命館大学　非常勤講師）
題　　目：エドマンド・バークの帝国思想
―帝国と自由のジレンマの中で―

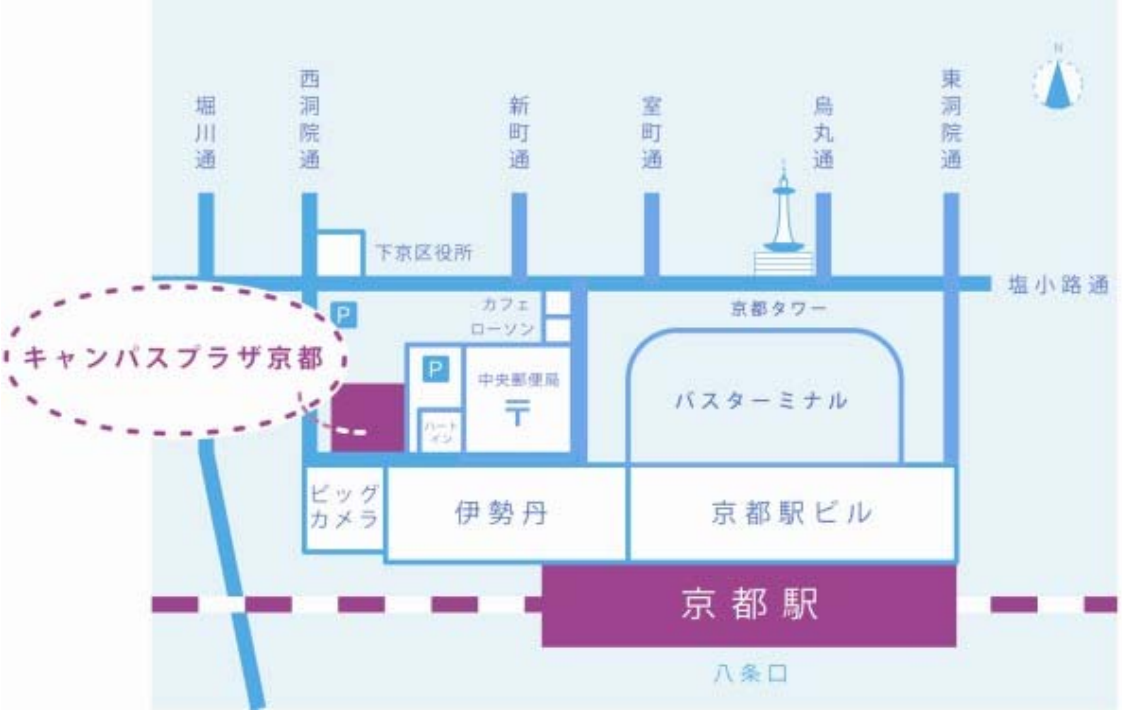
なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。
また、１２月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当
久米　　暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）
竹澤　祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

＜会場案内＞

キャンパスプラザ京都　京都大学サテライト講習室（６階・第８講習室）
〒600-8216　京都市下京区西洞院通塩小路下る
（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）
TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会　第４６回関西部会例会　報告要旨＞

報 告 １：デイヴィッド・ヒュームの国際社会理論
―国際関係研究における英国学派の思想とその再検討―

岸野　浩一

現代の国際関係研究における、「ホッブズ主義」(リアリズム)と「カント主義」(リベラリズム)の二つの主要なアプローチに対し、国際政治理論の英国学派(the English School)は、「国際社会」の伝統の存在とその意義を強調してきた。米国の理論研究と一線を画する同学派は、とくに哲学や歴史、規範と原理を重視する研究を展開している。本報告では、英国学派の理論的基礎をなすとされる主たる研究について考察を深め、国際関係の理論研究においてイギリスの哲学が有しうる意味や可能性を析出する。

そこで、英国学派の「源流」の思想などとして、英国内外で近年急速に再評価が進められている、ヒュームの法と政治の哲学を読解して、彼が展開した「国際社会」の理論とは何か、またその哲学的・方法論的な含意について考察する。そのうえで、ホッブズと「ホッブズ主義」、およびカントと「カント主義」の間にある両者のテクスト解釈上の諸問題を明らかにし、英国学派が自らの議論に際し基盤とする思想解釈をヒュームの理論を介して批判的に検討することにより、「国際社会」を概念化し分析する同学派の方法論について再考する。

（関西学院大学大学院　法学研究科博士課程後期課程）

報 告 ２：ジョン・ロックの反聖職者主義について
―サミュエル・パーカーとの比較を中心に―

武井　敬亮

王政復古以降、国教会体制の再建・確立を背景に、聖職者による政治への関与が、ひとつの重要な問題となっていた。このような聖職者に対するロックの批判的な態度（反聖職者主義 Anticlericalism）については、近年 M. Goldie や山田園子らによって注目されている。本報告では、Samuel Parker（1640-88；国教会牧師、後オックスフォード主教）の *A Discourse of Ecclesiastical Polity*（1670）を取り上げ、このような観点から、ロックとの比較を試みる。この著作は、非国教徒弾圧で有名な大主教ギルバート・シェルドンの意向を反映して書かれたものであり、秩序維持の観点から、非国教徒批判を中心に国家と教会の統一性を主張する。他方でロックは、公共の平和を維持するために宗教を強いることに対して批判を行う。このようなロックのパーカー批判を、『世俗権力二論』（1660－2）においても看取できるロックの反聖職者主義を軸に把握することが、本報告のねらいである。

（京都大学大学院　経済学研究科博士後期課程）

（裏面に続く）

報 告 ３：エドマンド・バークの帝国思想
―帝国と自由のジレンマの中で―

苅谷　千尋

本報告では、バークの帝国についての言語をブリテンの帝国概念史に置くことによって、バークが帝国をどのように理解していたのか、また同時代人との相違の一端を明らかにすることを目的とする。そのため、アーミテイジによって提起された近代帝国概念の分析枠組みである帝国と自由のジレンマを用い、植民地アメリカ問題、東インド会社問題についてのバークの議論を検討する。アーミテイジの整理によれば、自由と帝国の和解は、シドニーを嚆矢とする政治経済学の言語によって成り立ちえた。18 世紀後期のブリテン帝国の変質−七年戦争に伴う「海の帝国」の喪失と東インド会社のインド支配による「領域支配の帝国」−に向き合ったバークは、シドニーらの議論にどのように参加したのだろうか。

まず、ハンプシャー＝モンク、メータらバークの帝国概念を扱った先行研究とともに、バークに利用可能だった帝国概念について整理し、上述の概念史に位置づける。その上で、政治経済学において後景に退いていた帝国における政治、権力の問題を、バークが再び発見することになることが示されるだろう。

（立命館大学非常勤講師）